



◆一関出張所管内を流れる東北地方で一番大きい北上川は、平泉文化が栄えた背景に深く関わっていたことをシリーズ化してご紹介しています。 **北上川と共に生きた平泉文化** 第10弾 —平泉文化を支えた母なる川・北上川—

栄華を誇った平泉のその後 奥州藤原氏滅亡後、衰退していく平泉



大都市平泉のその後

平泉は、最盛期には人口が10万人を超える、京都に次ぐ大都市だったといわれています。1189（文治5）年、源頼朝によって奥州藤原氏が滅ぼされ、平泉は衰退していきました。奥州藤原氏に大切にされていた寺院などは、鎌倉幕府やその後の領主により保護されましたが、火災や戦火などにより、主要な建物などは失われていきました。度重なる争い、北上川やその支川のはん濫によって、都市・平泉の姿は変わっていきました。

藤原氏滅亡後の北上川

北上川のような大河を使いこなすには、奥州藤原氏のように大きな政治力と経済力が必要でした。しかし、陸奥国が頼朝の支配下になってからは、鎌倉武将の葛西清重が奥州総奉行に任せられ、北上川流域は細かに領土分けされていたようです。戦乱も続き、川沿いの領主の入れ替わりが激しかったと考えられています。

平泉の発展を支えた北上川は、鎌倉時代から江戸時代までの約400年、物資輸送よりも軍事面での役割が大きかったようです。



覆堂に守られた金色堂

1213（健保元）年、北条政子（源頼朝の妻）の夢枕に三代・秀衡が現れ、平泉に残された寺院の修理をうながしたことにより、鎌倉幕府は各地の有力者にその修理を命じたと伝えられています。

そして鎌倉幕府は、平泉を滅ぼして100年目の1288（正応元）年に、金色堂覆堂を建造しました。



平泉と松尾芭蕉

平泉は江戸時代前半、松尾芭蕉によって再びクローズアップされました。芭蕉は奥州藤原氏が滅亡してから500年後の1689（元禄2）年、弟子の曾良と「奥の細道」の旅に出発、同年5月13日に平泉を訪れ、今では誰もが知っている有名な句を詠みました。



高館に立った芭蕉は、眼下に流れる大河・北上川と、そこに合流する衣川、ただの草むらになつた辺りを眺めました。そして、中国の詩人・杜甫が作った「国破れて山河あり 城春にして草木深し（戦乱で国が滅びても山や川はそのまま、町には春が訪れ草木が茂っている）」という詩を思い起こし、時の移るまで涙を落とし、次の句を詠みました。

高館にて 夏草や 兵どもが 夢の跡

意味：かつて兵たちが功名を夢みてたたかった地も、今は夏草がしげるばかりだ。
（出典：歴史人物なぜなぜ事典）

続いて中尊寺をたずねた芭蕉は、覆堂の中にある金色堂を見て、次の句を詠みました。

金色堂にて 五月雨の 降りのこしてや 光堂

意味：五月雨も、光堂だけは降りのこしてきたのか。それほど今でも美しい。
（出典：歴史人物なぜなぜ事典）

金色堂旧覆堂



金色堂の金箔貼りを風雨から守るため、鎌倉将軍の惟康親王の命令で、金色堂を外側からすっぽり包む「覆堂」が造られました。現存する覆堂は室町時代中期に再建されたものです。

※バックナンバーはこちら http://www.thr.mlit.go.jp/iwate/svuttyoujyo/itinoseki/2020/2020_ichinoseki.htm
第1弾 NO.467 第2弾 NO.468 第3弾 NO.470 第4弾 NO.478 第5弾 NO.479 第6弾 NO.480
第7弾 NO.482 第8弾 NO.486 第9弾 NO.487

※北上川学習交流館 あいぼーと展示資料より